

SMFラウンドテーブル2012

2012年12月15日 埼玉県立近代美術館 講堂

「ラウンドテーブル」は、SMFの活動のなかでも重要な柱のひとつとして毎年、開催されてきました。今年も、主に美術館に関わりのある表現者やアートディレクター的な活動をされている方がたに声をかけ、6人(組)の発表者から活動報告を受けました。そして、その後は全体討議で自由な話し合いの場となりました。

趣旨説明と自己紹介の後、活動報告はおおきく二つに分かれた構成をとりました。

第1部は「アトリエを離れて」と題して、ご自身が作家活動をされている方がまちや地域と関わった活動をされている事例の報告でした。

今井伸治さんの「〈グルグルハウス高柳〉他の活動について」は、さいたま市内のアトリエから遠く離れた新潟県の豪雪地帯に発表の拠点をつくり、小学校での授業などでも精力的に活動されているようすが紹介されました。

柳井嗣雄さんの「〈蔵と現代美術〉について」は、川越市の蔵という空間で作品を展示するなかで、観光客の訪れる商業地域で

の文化活動の難しさや作家がプロジェクトを動かすことの問題点などが指摘されました。吉田富久一さん、長谷川千賀子さんも飛び入り出演しました。

白濱雅也さんの「コミュニティカフェ〈深川いっぶく〉他の活動について」は、ご自身がこれまでまちで起こしてきたアクションの系譜が紹介されました。作家としてのご自身と、アートディレクターとしての奥さまの関わりなどにも独特のスタイルがうかがわれていました。

第2部は「場から創る・場をつなぐ」。作家活動の一方で、どちらかというとアートディレクターやアートコーディネーターといった立場で、アートが立ち現われる場づくりに関わっておられる方がたからの報告でした。

鈴木のぞみさん・荻原貴裕さんの「〈関井記念館〉の活動について」は、さいたま市(旧浦和市)の古い民家を借りて、アトリエ兼ギャラリーとして活用されてきた報告でした。針穴写真機の原理で小さな穴から引出の中などに風景を定着させる鈴木さんの試みは、場との興味深い関わり方の例でした。

吉田武司さんの北本「〈アトリエハウス〉他

の活動について」では、北本市のキタミン・ラボ舎のやってきたプロジェクトをたどりながら、民家に住み込んでの現在進行中の活動が紹介されました。野菜の産地直売所をめぐるツアーなども地域に根差したアイデアで舌をまいてしまいます。

結びは、奥西麻由子さん・飯田成子さん・棚沢寛さんの「アートフェスタの展開について」の報告でした。美術教育の立場から子どもたちを森林公園(東松山市)のなかでの制作にいざなう試みは、新たな価値観に気付くことで成果が表れてきているということでした。

休憩をはさんでの全体討議では椅子の配置を変えて、全員の顔が見えるようなかたちで議論が紡がれていきました。参加したすべての方から意見をうかがったなかで、特に結論が出るわけではないのですが、「アートは自己表現で、デザインは問題解決」という発言が印象に残っています。アートな場をつくることは、アートだけでもデザインだけでも成立しないのでしょうか。(参加者:26名)

青山恭之 (SMF運営委員)



SMF「さんなすび展」& アート寺子屋「アートプロジェクトができるまで」

さんなすび展 2013年1月8日~13日 埼玉県立近代美術館 一般展示室
アート寺子屋 1月13日・27日 埼玉県立近代美術館 講座室ほか



「SMFラウンドテーブル」は、刺激的で意欲的なアート活動を展開する個人・団体が出会い、情報や課題を共有し、交流・連携を図る場としてしだいに定着してきました。一方で「せっかくこういうメンバーが集まったのだから、ハロー、グッバイ、また来年、ではもったいない。ここから具体的な連携プログラムを立ち上げて、協働の場を創っていけないか?」との声も寄せられていました。展示とミーティングがリンクした今回の試みは、そうした声に応え、協働への契機とすべく計画されました。

ラウンドテーブルの発表者を含めて、これまでSMFの事業にご出展・ご協力いただいたアーティストやアート関係者に呼びかけ、「アートをめぐるさまざまな夢・プロジェクトの素一やりたいこと、心を離れないこと、おもしろそうなこと、発信したいこと、思い付き、など」をプロジェクトシートに記入していただき、「さんなすび展」で展示公開するとともに、アート寺子屋「アートプロジェクトができるまで」の素材として活用しようというものです。年の暮れの時間のないお願いにもかかわらず、一富士、二鷹、三茄子と22名の方から計28件の多彩なアートの初夢を寄せてい

いただきました。

「木の棒の集合体(あなたもだいく)」、「記憶の容(かたち)プロジェクト—時間遡行機」、「花咲かアートさん」など、アーティストから提案された、大勢の人が関わり自然の中で時間をかけて熟成・実現したいプラン。「貧乏運動はさいたまから始まった」、「1日くらい黙って、言葉について考えよう」など、芸術の概念やアートが生成する場を問い直す試みの提案、「夢見る アートハウス プロジェクト」、「A.I.S.[Art Infomation Saitama]」、「いっぶくチェーンプロジェクト」、「SMF出版計画」、「SMFオフィス+書店」など、アートを社会に根付かせるいろいろなアイデア、また「まちなみのフレーム(住宅地編)」や「カプセル meets ヒアシンスハウス」(来場者提案)などの建築家ならではのプラン、さらに自身の作品や活動を展開させたイメージ作品まで、A4判2ページが基本フォーマットの限られた紙面ですが、それぞれの豊かな夢が詰まっており、来場者や寺子屋の参加者からは「全部やりたいね」、「見てみたい」、「参加したい」といった声が続ぎに上がっていました。また展示室の一角では、以前にラウンドテーブルにお招きした参加型表現集団wah

ドキュメントの資料や映像を参考として紹介しました。

会場でもっとも注目を集めたのは、社会芸術/ユニット・ウルスのみなさんが、炭粘土製のロートやもみ殻、燐炭、灰などを持ち込んで制作したインスタレーション作品「ウルスの泉—龍神プロジェクト」。歴史や風土、あたらしい水、自然との調和、人びとの協働など、壮大な構想を元にしたプロジェクトを象徴的に視覚化した作品で、来場者投票でも一番人気となりました。

2日間にわたっておこなわれたアート寺子屋は、出展者によるプレゼンを受けた後、共通点のあるアイデアをまとめたり、相互につないで可能性を広げたり、実現に向けての課題をクリアするため情報交換をおこなったり、自由闊達な意見交換の場となりました。また参加者同士が意気投合し共同で実現を図ろうと、直談判をはじめた方がたもいらっしゃいました。近い将来、三茄子が三本の矢となって、数かずの夢が実現されていくのが楽しみです。(さんなすび展 来場者:6日間計498名。アート寺子屋 参加者:2日間計33名)

中村誠(SMF事務局)

